

[成果情報名]樹皮を利用したリンドウの隔離床栽培

[要約]ヒノキとスギの混合樹皮を 30L 充填した隔離床で「No.47（おかやま夢りんどう早生 1号）」を栽培すると、定植 5 年目までの切り花本数は、慣行の地床栽培と同程度である。

[キーワード]リンドウ、樹皮、連作、隔離床栽培

[担当]高冷地研究室

[代表連絡先]電話 0867-66-2043

[研究所名]岡山県農林水産総合センター農業研究所

[分類]研究成果情報

---

[背景・ねらい]

リンドウは、連作障害が発生するため同一圃場では改植できない。しかし、ハウスを利用した促成、半促成栽培や栽培条件の良い圃場では、連作の要望が強い。そこで、軽量で安価に入手できる樹皮を利用した隔離床栽培を検討し、連作を可能にする栽培方法を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 隔離床区は、長さを約 5 cm以下（90%以上は 5 mm以下の繊維状）に粉碎したヒノキとスギの混合樹皮をプラスチック製コンテナ（幅40cm×奥行き60cm×高さ25cm）に30L 充填し、長辺どうしが接するよう 2 列で設置し、1 コンテナにリンドウを 6 株定植する（1,200株/a）（図 1）。慣行の地床区は、株間15cm、条間45cmの 2 条で定植する（800 株/a、県内の慣行）。
2. 株あたりの規格別切り花本数は、定植 3 年目、5 年目で地床区が隔離床区より若干多いが、2 L規格は隔離床区が多い。定植 2 年目、4 年目は隔離床区と地床区で大きな差はない（図 2）。
3. 開花日および切り花形質は、すべての年で隔離床区と地床区で大きな差はない（表 1、図 1）。
4. 定植 4 年目以降の切り花本数が 3 年目より減少した原因は、1 株あたりの茎数が減少したためではなく地床区、隔離床区ともに規格外（花段数の減少など）が増加したためである。

[成果の活用面・留意点]

1. 同一圃場において、継続して栽培が可能になる。
2. 施肥は、液肥または固形肥料で行うが、施肥方法については今後検討が必要である。本成果は、定植 1、2 年目は施肥と灌水を兼ねて液肥（窒素濃度100ppm）で 1 日最大1.6L/コンテナを 4 回に分けて施用し、3 年目以降は固形肥料を 4 月にN : P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> : K<sub>2</sub>O=10 : 9 : 12g/コンテナ施用した結果である。
3. 定植前は、樹皮を十分に湿らせ、定植後の灌水は、樹皮が乾かないよう自動灌水設備などでコンテナ下部から排水が出るように量と回数を調整する。本成果の灌水量は、1 日最大 5 L/コンテナを 4 回に分けて行った結果である。
4. 本成果で使用した樹皮は、岡山県内で購入可能なヒノキとスギが混合した粉碎樹皮で、粉碎後約 6 ヶ月野積みした物である。混合割合は一定ではないが、ヒノキおよびスギ樹皮単体で同様に栽培したところ生育に大きな違いがみられないことから、混合割合が生育へ及ぼす影響は小さいと考えられる。
5. 他の品種については、検討中である。

[具体的データ]



図1 栽培風景（左：定植1年目の様子、右：開花時の様子）

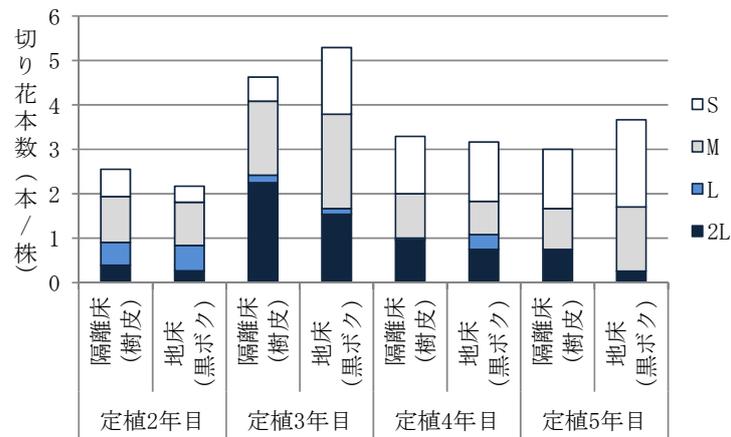


図2 リンドウの隔離床栽培が株あたり規格別切り花本数<sup>z</sup>に及ぼす影響  
<sup>z</sup>2L：90cm5段以上、L：80cm5段以上、M：70cm4段以上  
 S：60cm3段以上

表1 リンドウの隔離床栽培が開花および切り花形質に及ぼす影響

定植後年数	試験区(培地)	平均開花日(月日)	切花重(g)	切り花長(cm)	茎径(mm)	花段数(段)	小花数(個)
2年目	隔離床(樹皮)	7月22日	28	80	3.3	4.7	20
	地床(黒ボク)	7月24日	32	79	3.6	5.4	24
3年目	隔離床(樹皮)	8月5日	35	94	4.1	4.5	23
	地床(黒ボク)	8月5日	33	99	3.9	4.2	19
4年目	隔離床(樹皮)	7月30日	37	98	3.8	3.8	17
	地床(黒ボク)	7月31日	27	88	3.6	3.9	18
5年目	隔離床(樹皮)	8月1日	30	96	3.6	3.1	15
	地床(黒ボク)	8月2日	25	86	3.3	2.9	14

耕種概要：播種2010年4月15日、定植7月14日

(藤本拓郎)

[その他]

研究課題名：1) オリジナルリンドウの連続出荷と新作型の開発、2) 岡山県の気候に適したオリジナルリンドウの新品種育成による連続出荷体系の確立と栽培技術の改善

予算区分：県単

研究期間：1) 2007～2011年度、2) 2012～2014年度

研究担当者：藤本拓郎、森本泰史

発表論文等：藤本、森本(2014)岡山県農研研報、5:39-41